東京都立三鷹中等教育学校　後期課程進路通信「はるつげくさ」

春 告 草

第 102 号　平成 30 年 4 月 18 日　進路指導部発行

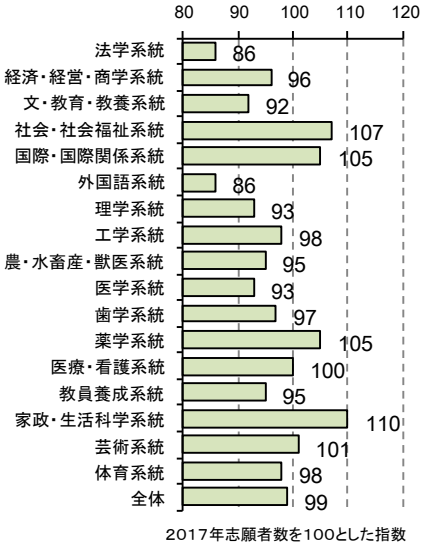
2018年度大学入試を振り返る

新年度が始まった。現行のセンター試験もあと2回で終わり、4年生からは新テスト「大学入学共通テスト」を受験する。新テスト情報も気にはなるが、年度初めにあたって今年度の入試を振り返っておこう。今回は国公立大を中心に記述する。

センター受験者数増も、国公立大志願者数は減

今年度のセンター試験受験者数は58万3千人、昨年より約7千人増加した。現役志願率も44.6%で過去最高となった。国公立大学部系統別志願者指数を右図に示したが、全体の指数は 99 で、グラフを見ても昨年度を下回った系統が多い。センター受験者は増えたが、国公立大志願者数は逆に減っている。理由の一つは一橋大学全学部で推薦入試が始まるなど、国立大学における推薦・AO入試の拡大傾向が続き、これにより後期日程試験を廃止する大学も増えていることであるが、倍率も17年 4.7 倍→18年 4.6 倍とややダウンしている。後期試験受験をあきらめた受験生も多かったようだ。後期試験まで粘って受験することが、国公立大現役合格への着実な方法であることは覚えておこう。

国公立大　学部系統別志願状況



国公立大は「文低理低」？

好調な就職事情を背景に文系学部の人気は高い。その分、理系人気は下降気味で、最近の入試事情は「文高理低」である。ところが右図を見て分かるように、多くの学部系統で昨年並みの「100」を下回っている。文系では社会・社会福祉と国際・国際関係、理系では薬と家政・生活科学はアップしたが、他の系統は文系・理系ともに「微減～減少」と低調である。国立大の「文系縮小」も相俟って全体に「文低理低」状態と評価しても良いくらいだ。法学部は混迷・低迷する法科大学院の状況が大幅減につながった。

難関国立大は志願者増

旧帝大を中心とした難関10大学の出願状況を右表に示した。前期試験については、これら10大学全体で 1,043 人、前年比 101.8%の増加である。国公立大出願者減少と書いたばかりだが、難関大では志願者は増加している。個々の状況を見ていこう。

国立難関10大学出願状況

大学名	前期日程試験		後期日程試験	
	志願者数	前年比	志願者数	前年比
北海道大	5,833	105.3	4,016	98.0
東北大	5,242	106.4	1,398	120.9
東京大	9,675	101.5	－	－
東京工業大	4,229	101.5	469	89.7
一橋大	2,935	101.0	1,201	76.2
名古屋大	4,752	100.6	53	88.3
京都大	7,861	99.8	372	76.4
大阪大	7,867	106.4	－	－
神戸大	5,634	94.4	4,346	107.2
九州大	5,246	101.1	2,479	90.0
難関10大学計	59,274	101.8	14,334	97.5
その他国公立大計	198,588	99.0	163,908	96.7

北海道大学　前期全体では 105.3%の増加。特に理系では、昨年の志願者減の反動で志願者増加となった学部が目立った。文系でも、総合文系、法、経済で志願者が増加し、特に経済の増加率が高かった。反対に教育学部は志願者が大きく減少した。これは逆に志願者増加の反動である。3期生は2名が総合理系を受験し、2名とも合格した。（以下、合格実績は3期生の受験状況である。既卒生で合格者が出た場合は併記した。）

東北大学　前期全体では 106.4%の増加。教育学部は昨年志願者が大幅に減少したが、今年は5割近く増加した。他の文系学部も昨年の反動で軒並み志願者は増加した。理系学部では理学部、医学部でやや減少した。経済後期は昨年より5割増。一橋大後期試験が経済学部のみでの実施となったことから、志願者の集中を警戒した受験生が集まったとみられる。本校からは5名受験し、2名合格した。

東京大学前期日程
第一段階選抜合格者データ

科類	志願者数	第1段階選抜合格者数	合格者平均点	合格ライン	
				得点	得点率
文一	1,323	1,204	756.22	582	64.7%
文二	1,201	1,068	781.30	703	78.1%
文三	1,535	1,407	788.77	738	82.0%
理一	2,992	2,774	802.00	715	79.4%
理二	2,174	1,862	785.31	717	79.7%
理三	450	389	793.45	630	70.0%

900 点満点。全学の前期志願者総数は 9,675 人（前年比 1.5%増）。各科類の合格率は以下の通り。文一 91.0%／文二 88.9%／文三 91.7%／理一 92.7%／理二 85.6%／理三 86.4%。

東京大学　前期日程のみの実施で前年比 101.5%の微増。文一は101.0%。昨年、志願者が増加した文二は、前年比 106.8%と今年も増加した。私大も含めて、経済人気は高い。第1段階選抜の最低点も前年の 623 点から 703 点と大きく上昇した。文三は前年比 98.1%と2年連続の志願者減。理科類では、理一で前年比 103.1%、理二で同 103.2%といずれも志願者は増えたが、理三は前年比 85.4%の大幅減となった。志望理由書の提出、面接試験の導入の影響であることは明白だ。3期生は6人受験し1名合格した。2期生で理二に合格1名が出ているが、この生徒は昨年、私大医学部に合格している。

東京工業大学　前期全体では前年比 101.5%の増加。第2類（材料系）の2割増は昨年の反動。第5類（通信・情報系）と第6類（土木・建築系）でも志願者は増加。第7類（生物系）は志願者が大きく減少した。センター試験は基準点としての利用で、センター試験 600 点以上が出願条件である。個別試験は数学、物理、化学、英語の4科目で、数学、理科に比重のかかった配点（数学 300 点、物理・化学各 150 点、英語 150 点）だが、英語も侮れない。東工大受験者は理数ができて当たり前、英語で合否が決まると思っても良いだろう。本校からは4名挑戦したが合格は出なかった。

一橋大学　前期出願者数は前年比 101.0%と微増。学部別では社会学部が昨年の反動で今年は3割増となった。経済は2年連続の増加。逆に、法、商は昨年の反動で志願者は大きく減少した。後期は経済のみでの実施で、志願者は2割以上増加した。本校からは6名受験し3名合格した。

名古屋大学　前期出願者数は前年比 100.6%の微増。学部別では、教育、法、工で減少。法の減少は2年連続増で難化したことの反動。昨年学科改組を行った工学部では、昨年低倍率のエネルギー理工学科で志願者増だが、マテリアル工、機械・航空宇宙工では志願者減となった。経済は他大学同様経済人気もあって前年比2割増。昨年改組した情報学部も志願者は1割増となった。後期日程は医学部医学科のみの実施だが、今年より出願条件が愛知県内出身者に限定され、前年比 88.3%と減少した。本校からは2名が受験し1名合格した。

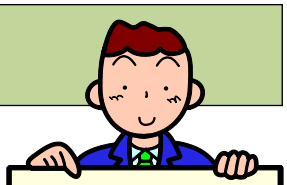
京都大学　前期志願者は前年比 99.8%。教育学部は昨年の大幅増の反動で前年比 82.9%と減少。一方、農学部は逆に昨年の減少から前年比 108.9%の増加。農学部人気に陰りが見えている中で志願者を集めた。医学部人間健康科学科は改組のあった昨年入試で難化した影響を今年も引きずり、前年比 74.3%と大きく減少した。法学部特色入試は後期試験として実施されるが、前年比 76.4%と大きく減少した。3期生の受験は2名で合格は出なかった。2期生が2名受験し2名合格している。

大阪大学　前期日程全体では 106.4%の増加。昨年入試では、後期日程廃止に伴う前期の募集枠拡大があったものの志願者が前年並みにとどまった結果、低倍率となった学科・専攻が多かったが、受験生にとってはこれが狙い目に映ったようだ。学部別に見ると法、工学部を除き、志願者は増加した。法学部は昨年入試で志願者が3割以上増加、難化したため警戒されたようだ。工学部は理工系3学部（理、工、基礎工）の中でもセンター国語の配点が高い。国語の難化の影響から、他学部や他大学へ志望変更した受験生が多かったようだ。本校からは1名受験し合格した。

神戸大学　前期日程全体では 94.4%の減少。過去2年間、志願者増加が続いていて、難化した反動とみられる。学部別に見ても志願者の減少が目立つが、経済学部は志願者増である。経済人気もあるが、今年より3区分での募集（数学選抜 30、英数選抜 30、総合選抜 160）となり、募集人員が増加したことが最も大きな理由だ。農学部は昨年の志願者減、易化の反動で、志願者は1割近く増加した。

九州大学　前期志願者は前年比 101.1%。新設された文理融合型の共創学部は募集 65 名に対し志願者は 204 名、志願倍率は 3.14 倍。2段階選抜（約4倍）が予告されていたこともあり、初年度としてはやや低倍率だった。ただし、他学部と比較して高めの倍率ではある。本校からは1名受験し合格した。

大学入試の基礎知識（２）



４年生からは新テスト「大学入学共通テスト」が実施される。センター試験もあと２年で終了するが、入試における利用の仕方はこれまでと変わらない。「センター試験」のことを学んでおこう。

センター試験を知ろう

センター試験は大学受験生の約８割が受けるとされ、大学入試はセンター試験を中心に展開しているといっても過言ではない。国公立大志願者は受験が義務づけられており、私立大も約９割が利用している。今年は58万3千人が受験した。

センター試験の役割と日程

センター試験は高校での学習の到達度をみる学力試験のことであり、これを合否判定に利用する大学が大学入試センターと協力して、毎年実施されている。

センター試験の受験手続きの詳細をまとめた「受験案内」（出願書類）は、６年生には９月上旬に学校で配布するが、最寄りの大学でも入手できる。現役生の出願手続きは、受験票の配布（交付）も含めてすべて在籍校経由で行われることになっている。センター試験の本試験は１月13日以降、最初の土日と定められていて、今年度は過去最も早い実施となった。来年度は19日、20日である。私立大の早いところは１月末から入試が始まるので、私大対策もセンター受験前から計画的に進めなければいけない。

出題形式と対策

国公立大入試は「センター試験と個別試験の成績を総合して合否を判定する」ので、センター試験対策は重要である。センター試験は全問マークシート形式だから簡単だと侮ってはいけない。進路通信100号に掲載した入試の総括コメントにも「首都大（合格）は４名、うち指定校推薦が２名という厳しい結果に終わっている。皆、セ試の得点不足による不合格である。学年の中～下位層が首都大を手中に収めるにはセ試で失敗しないことが前提である。」とある。首都大には16名が一般受験したが、合格は２名だった。

今年のセンター試験の平均点は第91号、94号に掲載したが、６期生も後期課程に加わったこともあるので、改めて右に再掲した。（全国平均点は、入試センター発表の確定データ、本校文は自己採点データの集計結果である。）見れば分かるように、平均点はどの科目も60点前後であり、70点を超えている科目もある。したがって難関大を目指すのであれば、８割以上を得点したい。表面に東大の第一段階選抜のデータを掲載したが、文科三類の合格ラインは82％だ。これ以下では「足切り」で個別試験を受験する前に「不合格」が決まってしまうのだ。

センター試験で目標点を獲得した人の多くはセンター試験の過去問や予想問題などを使って、制限時間よりも短い時間で問題を解く訓練をしている。これは、出題傾向をつかむと同時に、問題数が多いと指摘されるセンター試験の「量」への対策といえる。

大学入試センターのホームページではリスニングテスト音声を聞くこともできる。是非、閲覧してみよう。

http://www.dnc.ac.jp/center/listening.html

大学入試センター試験受験スケジュール

2018年		
現役生は在籍校経由で手続きを行う	９月上旬～	受験案内配付
	９月上旬～ 10月上旬頃	検定料等払込み
	９月末～ 10月上旬頃	出願期間
	10月末頃までに到着	確認はがき受領 （登録内容の確認）
	12月中旬までに到着 （登録内容の再確認）	受験票等受領 （受験票／写真票／成績請求票／受験上の注意）
2019年		
1／19(土)･20(日)		本試験実施 正解等の発表
1／23(水)頃		平均点などの中間発表
1／25(金)予定		得点調整実施の有無発表
1／26(土)･27日(日)		追(再)試験実施
2月上旬予定		平均点等の最終発表
4月中旬頃		成績通知書の受領 （出願時に希望した者のみ）

平成30年度センター試験平均点

教科グループ	科目	配点	平均点 本校	平均点 全国	全国平均点（昨年度）
国語	国語	200	135.7	104.68	106.96
地理歴史	世界史B	100	85.7	67.97	65.44
	日本史B	100	77.8	62.19	59.29
	地理B	100	72.9	67.99	62.34
公民	現代社会	100	※	58.22	57.41
	倫理	100	83.9	67.78	54.66
	政治・経済	100	77.9	56.39	63.01
	倫理、政経	100	81.6	73.08	66.63
数学①	数学Ⅰ数学A	100	75.9	61.91	61.12
数学②	数学Ⅱ数学B	100	69.9	51.07	52.07
理科①	物理基礎	50	43.8	31.32	29.69
	化学基礎	50	36.5	30.42	28.59
	生物基礎	50	43.3	35.62	39.47
	地学基礎	50	※	34.13	32.50
理科②	物理	100	79.5	62.42	62.88
	化学	100	75.9	60.57	51.94
	生物	100	81.0	61.36	68.97
	地学	100	―	48.58	53.77
外国語	英語	200	159.6	123.75	123.72
	リスニング	50	31.5	22.67	28.11

尚、４年生以降が受験する「大学入学共通テスト」と現行の「センター試験」との相違点を下表にまとめた。

「大学入学共通テスト」の概要

4年生必読

名　称	大学入試センター試験	大学入学共通テスト
実施年度	～2019年度（現5年生受験年度）	2020年度（現4年生受験年度）～
出題教科・科目	6教科30科目	センター試験と同じ ※2024年度以降は簡素化を検討
出題形式	マークシート方式	国語、数学で記述式を導入 ※2024年度以降は地歴、公民、理科も検討 【国語】・80字～120字程度の問題を含む3問程度 ・出題範囲は「国語総合」（古漢を除く） ・マークシート問題とは別の大問 ・試験時間は100分に延長 【数学】・「数Ⅰ」「数Ⅰ・数A」で出題 ・数Ⅰの範囲を3問程度 ・マークシート問題と混在の出題 ・試験時間は70分に延長
英　語	2技能（Reading、Listening）を評価	4技能を評価、民間の試験を活用 民間試験の受験は高3の4～12月に2回まで 2023年度までは民間試験と共通テストの英語を併用 （大学が利用方法を指定）
成績結果・提供方法	・各科目1点刻みで採点し、合計点を提供 ・国語は「近代以降の文章」「古文」「漢文」の3分野を別々に成績提供	・マーク部分は現行より詳細情報（設問・領域・分野ごとの成績、段階別表示などを検討）を提供予定 ・国語は一括提供を検討 ・英語はCEFR（※）の段階別表示 ・記述式は段階別評価（3～5段階）

※CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠／Common European Framework of Reference for Languages）
外国語の学習・教授・評価(Learning Teaching Assessment)のための国際指標　春告草第99号より転載

2019年度　国公立大学入試の変更点

国公立大学の次年度入試について変更点が各大学から発表されている。全部を掲載するのは無理なので、首都圏を中心に紹介するが、志望大学の情報収集は各自で取り組むよう心がけよう。

□学部等の増設・改組

東京外国語大　国際日本学部（仮称）を開設予定（定員75人）。既設2学部を定員減（言語文化370人→335人、国際社会375人→335人）

東京農工大　工学部を再編・統合（8→6学科）

□募集人員の変更

筑波大　知識情報・図書館学類＝前期50人→40人、推薦30人→40人／社会工学類＝前期80人→83人、推薦20人→22人、AO5人→廃止

千葉大　法政経＝後期75人→70人、経済学部特進プログラム選抜：若干名→AO5人／工＝前期459人→466人、後期141人→124人、AO20人→30人、理数大好き学生選抜：若干名→廃止

東京外国語大　国際日本（新設）＝前期35人、推薦10人／言語文化＝前期343人→290人、推薦12人→45人／国際社会＝前期251人→254人、後期109人→56人、推薦25人（新規）

□一般入試の科目等の変更点

埼玉大　［個別］教育（中学社会）前期＝総合問題→小論文

千葉大　［個別］薬（薬科学）後期＝総合問題→理科2科目。［2段階選抜］法政経＝予告倍率を「前期＝募集人員の4倍→3．5倍、後期＝同15倍→13倍」に引き締める

東京外国語大　［新設］国際日本・前期＝セ試は5教科5科目または6科目、個別は「英語、地歴、英語スピーキング」

東京工業大　［募集単位］「類別募集→学院別募集」に移行。ただし、前期は全学一括募集。希望順に3学院を選択して出願し、入試成績順に所属学院を決定。後期は生命理工学院のみ実施

□推薦・ＡＯ入試等の変更

●推薦入試

千葉大　工で理数大好き学生選抜を廃止

東京外国語大　国際社会でセ試免除推薦を新規実施（英語外部検定利用）／言語文化で、セ試免除推薦を実施する専攻言語の募集単位を「6→15」に増加

●ＡＯ入試

千葉大　法政経でセ試を課すAOを新規実施（経済学特進プログラム志望者対象。英語外部検定利用）し、経済学特進プログラムを廃止／工（総合工＝物質科学）で、AO（方式Ⅰ＝セ試を課す、方式Ⅱ＝課さない）を新規実施

筑波大　社会工学類でセ試免除AOを廃止

横浜国立大　理工（機械・材料・海洋系＝材料化学EP）で、セ試を課すAOを新規実施（EP＝教育プログラム）